

安野ゆり子

（令和四年三月号）

カーディガンに身を包ませていれば我しみじみ患者なんだと思う
誰もいない誰も行けない中庭を見下ろす何か枯れている庭
富士山が五センチほどに見えるのが唯一取り柄であるこの窓辺
売店で三ツ矢サイダー買うという彼女さざ波のように恥じらう
一房に種一つあるぽんかんを白きベッドに腰掛けて食む
午後中を塗り絵にあてて一枚のマンダラ模様完成したり
看護師が談笑しながら運びくるワゴン今夜はクリームシチュー
誕生日だった一日暮れゆきてカーテンを引く音を立てずに



●作者の言葉

一昨年冬の冬と春、そして去年の春に計三回精神科に入院しました。入院中は持ち込みや外出に制限があり、つまら

ないです。塗り絵や読書をするも一日は長すぎます。退屈でやることがないから、患者や看護師の小さなひと言が短歌になりました。

今年の春も相変わらず具合が悪かったです。入院をせずに済みました。病棟の乾燥機にかけられたユニクロのカーディガンは、まだ着られます。先日、三年ぶりに自宅で誕生日を過ごしました。

●選者の言葉

巡り合わせもあるが、去年七月号からのこの一年間に、安野ゆり子の作品を二度特選一位に選んだ。今年の三月号と五月号である。安野の作品には以前から折々注目していたが、特に最近の作品は切実に胸に響く。ただしその切実さの或る部分は、闘病生活という現実から来ているので、作者としては複雑かもしれないが。

私は五月号の「選歌ルーム」に次のように書いた。「閉鎖病棟での日常を淡々と歌う。これを『諦観』と呼んでもいいだろうか」。作者はごくたんとたんと自らの直面する現実を記す。その背後には三月号の一首目の「カーディガン」に象徴される、無垢な魂の手触りがある。そのナイーブさが痛ましさを凌駕する点に心を打たれる。